

灯ともし頃の福島

福島に電灯が点いたのは何時ごろであろうか。

「小松電気株式会社」の資料によると、大正九年末である。

この年に、小松・安宅・板津・苗代・牧・白江・御幸・金野・大杉谷・鳥越・根上が配電区域になったと書かれている。

当時の街灯数は、六百三十五、引用戸数は七千四百四十一であり、その灯数は一万五千五百六十八であったとの記録が残されている。

また、根上変電所が、昭和七年十二月に設立の記録があるので、昭和初期には、それまでの行灯に替わって、各家々に一応電灯が点いたと考えても良い。

昔は、なんであんなに、蝙蝠が夕方に空が暗くなるほど飛んでいたの
であろうか。

「蝙蝠・こうもり、ばつきんこ、田んぼの鼠の化けたがじゃ」と叫びながら、竹竿を振り回して、蝙蝠と遊んだ記憶は、老年に達した人々の思い出ではなからうか。

電気会社の人が、街道の電信柱のスイッチを竹竿でつけて歩いたのについて、子供たちは歩く黄昏の頃が懐かしい。

また、「てんとば」と呼んだ、「鼯」が道を横切つて隠れる。

早い家では「まみやぞう」と呼んで、夕ご飯が出来たと兄や姉が呼びに来る、「あこの家は、おやきやさけ」と言い、呼ばれない子供は暗く

なっても、独りで遊んでいるのであった。

その時代は、どんな金持ちの家でも、家の中の電灯は、十燭光の電灯一個であり、夕飯は電気の下で食べ、母が「流し」をする時には台所まで、その電灯を移動させる。

従って、どんな家でも、家の中には針金で、電灯を移動させる線が張られて、いたのも懐かしい風景であった。

また、その電灯のタングステンが切れると、配電会社に現物を持参して交換しなければならぬ事になっていた。

交換の使いは、大抵子供たちで、大成の「水野」さんが交換場所であった。

水野さんでは、古い電灯をおもむろに調べ、新しい電灯をつけて見てから、渡してくれた。

水野の小父さんも、お母さんも中々威厳があつたなどの記憶があつたし、帰りには「宝物」を抱くようにして帰った、のは七十年以上前の記憶である。

そんな記憶が、今でも電灯をなるべく消す癖になつており、特に戦争中の「石油の一滴は、血の一滴」の、標語を、「そのとおり」と墨守している、日々を、我ながら「貧乏人」と思っている。

私の老妻も、同じである。